

# 池田文書の研究 (43)

## 医師の書簡 (その2)

### 池田文書研究会

#### [5] 足立寛の書簡

足立寛は天保13年生まれ大正6年没。遠江国生まれ。明治2年大学東校大助教。陸軍々医学校々長・陸軍々医総監歴任。享年76。(1842-1917)

(注) 整理番号3490号に明治14年9月17日付け宮内省より京都差遣の辞令あり。尚その前年12月頃にも桂宮拝診の為京都に派遣される。

1 明治14年8月29日 (61)

(封筒表) 駿河台北甲賀町十三番地

池田謙齋様 親展

東京本郷真砂町十二番地 足立寛

(住所入り角印)

(封筒裏) 本郷真砂町十二番地 足立寛

(消印 東京・一四・八・二九・り)

拝呈仕候、増御清祥奉拝賀候、然ハ愚弟謙二より別封到来致候間、不取敢御届申上候、草々頓首拜

八月廿九日

足立寛

池田謙齋様 侍史

2 明治 年 月 27 日 (53)

(封筒表) 池田一等侍医殿 閣下

(封筒裏) 桂宮ニテ 安藤精軒

益御勝常奉拝寿候、桂宮様先生御退出之後御大便軽量三回、御小水かなり御壺行而已、未乳汁等も不被為召上候得共、昨日之如く御眩暈等も不被為在、至極御静穩ニ御座候間此段御報知申上候、尚藤崎殿よりもよろしく可申上との事ニ御座候条、此段添て申上候、先ハ前件而已、早々謹言

廿七日

春海生

池謙齋先生 侍史

尚過刻之御菓子任幸便御廻し申上候、頓首

#### [6] 安藤精軒の書簡

安藤精軒の経歴は「日本医史学雑誌」第58巻第1号に記載。明治21年侍医局勤務となる。

1 明治14年9月24日 (52)

御安着大慶此事ニ奉存候、桂宮様<sup>(1)</sup>先々御静穩ニ候間、此段御安心可被下候、小生義も早速参向可仕之処、宿直ニテ背本意候得共よろしく御断奉申上候、何れ明日拜芝万々可申上候得とも右之段申上度まで、早々頓首

九月廿四日夜

安藤精軒

池田一等侍医殿 侍史

略封御免可被下候

3 明治17年1月2日 (49)

恭奉賀新禧、先ツ以テ清門被為揃益御勝常可被遊奉敬賀候、昨年中ハ蒙御懇誼難有仕合セ奉存候、右年甫御祝詞奉申上度迄、恐惶謹言

明治十七年一月二日 安藤精軒 勝忠 花押

池田謙齋先生 侍史

4 明治(21)年12月6日 (47)

(封筒表) 池田謙齋殿 侍史

(封筒裏) 安藤精軒

芳翰難有薫読仕候、私儀、身分之儀ニ付大臣閣下へ御申立被成下候次第も有之、出立一兩日見合可申儀、御懇命之段難有拝承仕候、御仰ニ従ひ一兩日出立相見合申候間、乍恐何分宜敷御執成之程只管奉懇願候、何れ拜芝之上万々御礼可申上候得

(1) 桂宮 仁孝天皇第3皇女桂宮淑子内親王。京都に在住。明治14年10月没。享年53。

共、不取敢御請迄、恐惶頓首

十二月六日 安藤精軒 拜白  
池田先生 閣下

(注) 明治21年侍医局勤務(在京都)辞令の事か、

5 明治(21)年12月12日 (48)

(封筒表) 東京神田駿河台 池田謙齋殿 侍史  
(封筒裏) 京都富小路二條南 安藤精軒  
謹啓、過日来滞京中ハ屢拜芝過分之御懇命を辱し  
難有奉拜謝候、昨十一日第一列車にて帰西仕候間  
不取敢御礼旁右申進度迄、恐惶頓首

十二月十二日 安藤精軒 拜  
池田先生 閣下

6 明治 年4月29日 (1108)

記

一、御封状 壱通  
一、御看 壱籠  
右ハ精軒留守中ニ付御預申上置候、何レ拜眉之節  
御礼可申上候

四月廿九日 安藤精軒 執事  
池田先生 御使

#### [7] 石井謙道(信義)の書簡

石井謙道はボンペ・緒方洪庵に学び美作国勝山藩の江戸詰医師を勤める。謙道の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に6通掲載、未掲載分を記す。

1 明治 年4月7日 (372)

拝啓、益御清穆御義穀奉拵賀候、過宵ハ昇堂、乍例御邪魔仕候、擬本日あたりハ浜丁式丁目三番地平野重彰方へ御往診被下候御都合ニハ参申間敷候也、実ハ患家日々翹望罷在、小生も本日午後四時頃迄ニ廻診之心組ニ御坐候間、若し御光賁被下候ハ、其趣報道いたし置度、或又幸ニ其節御出会に申候を得ハ別して好都合ト奉存、否御様子奉伺候、御一答奉願候、頓首再拜

四月七日 石井信義  
池田賢台 梧下

#### [8] 石井淡の書簡

石井淡は明治12年より32年迄侍医局医員・勤務を勤める。淡の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に1通掲載に付き省略。

#### [9] 石神良策の書簡

石神良策は海軍々医制度の創始者。良策の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に1通掲載に付き省略。

#### [10] 石川公一の書簡

石川公一は明治13年東大医学部卒業。25年より侍医局勤務、27年より侍医を勤める。

1 明治 年 月 日 (3208)

連日之冷雨困却之事ニ御座候、一昨宵ハ非常之失礼相働申分無之、一応参邸御詫可申上筈に御坐候処、却テ御華墨頂戴仕恐縮汗顔之至ニ御坐候、借富美宮殿下御還御之儀来ル廿七日と御決定被為遊候処、昨日葉室属右之為メ帰京、林御養育主任<sup>(1)</sup>(欠)御意見は来ル廿五日御還御被為遊候方可然と之御事ニ承り候ニ付、一先閣下之御意見御伺被下度様同属へ相談置候所、今朝相伺候上電文ニテ箱根へ問合候由、其返事ニハ頃日ハ(欠)気合も不宜候間、廿七日に(欠)返報有之申候、右ニ付テハ小官御迎之為来ル廿六日一番汽車ニテ参箱可仕心算ニ御座候、先ハ御還御日取御意見之通り確定相成候儀申上度、如斯ニ御坐候、敬具

(欠) 午後 公一 拜  
池田尊師 閣下

(1) 伯爵 林友幸 明治24年より富美宮養育主任を勤める。

#### [11] 石黒忠恵の書簡

子爵 石黒忠恵は陸軍々医総監・日本赤十字社々長を勤める。忠恵の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に46通・日本医史学雑誌第56巻第4号に3通掲載に付省略。

## [12] 伊勢錠五郎外の書簡

伊勢錠五郎は明治13年東大医学部卒業、28年11月より侍医を勤める。

1 明治38年5月25日 (565)

拜啓、来二十九日午後正六時赤坂三河屋ニ於テドクトルベルツ殿送別会相催度候ニ付、万障御繰合御来会被成下度、此段御通知申上候也、敬具

明治三十八年五月二十五日 伊勢錠五郎

加藤照磨

片山芳林

幹事 相磯髓

西郷吉義

高階経本

池田謙斎殿

追テ御出席ノ有無来二十七日迄ニ侍医局属室迄御報相成度候

(コンニャク版)

## [13] 市川賢亮の書簡

市川賢亮は明治8年9月侍医局薬剤生、10年より30年迄医員として侍医局に勤める。

1 明治 年6月18日 (203)

尊翰奉拝誦候、陳ハ御紙表之趣逐一奉拝承候、早速伊藤<sup>(マア)</sup>方成殿え右之由御通知可致候、此段御休神可被下候、扱亦過刻伊東方成殿え御差出之御状御返書参居申候間、即チ只今御廻送申上候、実ハ只今御書御着ニ付此御返書開封仕候ニ付、此段も御断申上置候也、頓拜

六月十八日

市川賢亮

池田一等侍医様 閣下

2 明治15年7月23日 (371)

拜呈、陳は甚暑一層苦熱相覚申候所、御尊堂御揮<sup>(マア)</sup>家様被為揃益御勇壮奉慶賀候、扱此間中ハ御令姉<sup>(1)</sup>様御不幸之由、御愁傷之至奉恐驚候、未タお悔も不申上失敬之至御用捨可被下候、陳は此品乍如何御忌服中御見舞迄ニ奉尊覧入候、本日ハ当番ニ付乍略義以是此段奉申上候、何レ不日拜趨之上万々奉謝上候、頓首

七月廿三日

市川賢亮

池田先生 肩皮下

(1) 行田八重子<sup>なめた</sup> 池田謙斎の4番目の姉。明治15年7月16日没。

## [14] 伊藤の書簡

詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年3月25日 (1265)

柿沼谷藏 卅二年

廿四日 正午十二時 体温 卅七度七分

呼吸数 廿二至 脈数 百五至

午後六時 体温 卅八度三分

呼吸数 廿八至 脈数 百二十至

午後三時頃灌腸ヲ施シ、其後十四五分時余ヲ経テ十分ノ通利ヲ得、大ニ精神爽快之状態ヲ呈ス

同十一時 体温 卅七度四分

呼吸数 廿一至 脈数 百十一至

体温・呼吸・脈数共ニ減少シ、充分ノ安眠ヲ得タリ

廿五日 午前八時 体温 卅七度一分

呼吸数 廿四至 脈数 九十六至

昨夜ハ灌腸之為メニカ大ニ安眠ヲ得、譚語も大ニ減少致居候、猶又御足旁ニハ候得共先生へ御来診可被下様呉々も懇願被申出候

三月廿五日

伊藤

先生 閣下

ノ

先生 閣下

伊藤

廿五日

## [15] 伊東方成関連の書簡

伊東方成は明治2年より24年5月20日迄侍医を勤める。方成の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に34通掲載した。未掲載分を記す。

1 明治14年1月6日 (169)

(封筒表) 電報 麩屋町姉小路俵屋方 池田謙斎  
宮内省侍医局 伊藤方成<sup>(マア)</sup>

電報

発局 官報 第六十号 中央分局 一月六日

午後三時十分 字数九十四字

着局 第九五号 西京分局 四・二五  
届 麩屋町姉小路 俵屋方 池田ケンサイ  
出 宮内省ジイキヨク イトウホウセイ  
サルニジウシチニチノテガミジヨウシンシタリ、  
キカンキキヨウヲヲセツケラルルムネ、タダイマ  
クナイキヨウタツセラレソロ、スベテタカシナ<sup>(1)</sup>  
エモヲシツギ、キタクシダイシツハツコレアルベ  
クソロ

(1) 高階経徳 明治2年大典医。8年より22年  
迄侍医を勤める。

(注) 池田謙斎は明治13年12月頃より仁孝天  
皇第3皇女桂宮病氣見舞いの為京都滞在中。

2 明治 年10月20日 (170)

(封筒表) 池田一等侍医殿 無事御用

青山御所 伊東方成・竹内正信

拝呈仕候、然ハ青山御所今朝御拝診後三時前迄別  
段御異状不被為在候処、三時後より御胃部御擧  
痛、同時御軟便御多量御通利後御擧痛弥相加り四  
時半頃ニハ余程御困り被遊候由、同五時二十分過  
竹内君御出頭、兩人拝診仕候処、御胃部は御小腹  
迄御全腹御擧急被遊候処、半時間前より少々御緩  
ミニ相成候処にて拝診仕候、其節も御困難ニ見上  
候ニ付不取敢モルヒネ八分グレイソノ一御頓服差  
上、半時間相伺候処、頗る御緩解被為覚候、只今ハ  
御心下御痞硬御腹満等等且ツ御熱候とも不奉伺候、  
弥以一時御胃瘵之御容体ニ奉伺候、右ニ付明朝御  
拝診御出頭被下度候、小生義ハ午後出頭可仕と奉  
存候、尤も御都合ニ寄り明朝御差支等にて御出頭  
被成兼候ハ、小生明朝拝診仕候て宜敷候、乍御面  
倒御寸答可被下候、右得御意度如此ニ御座候也

十月廿日夜七時半

伊東方成

竹内正信

池田一等侍医殿

3 明治 年12月27日 (189)

尚々水腫後五六日間打腫致度相考候

拝呈仕候、然ハ今朝右大臣公拙診仕候処、一昨日  
御加減之散薬御服用已来御脚痛大ニ御減少被遊、

至極御相応被遊候事ニ(欠)致候、御散薬ハ御持  
長被遊候様申上置候、且ツ一昨日御相談申上候芫  
菁膏<sup>(1)</sup> 昨今之内帖し度候、御用意も御座候ハ、  
今明日中御参診御決定被下度奉願候、右御相談仕  
候、草々不備

十二月廿七日

伊東

池田様 侍史

(1) 芫菁<sup>かんせい</sup> アオハンミョウ(青斑猫・虫名)。  
毒あり。葉として膏薬やチンキを作る。

4 明治 年9月30日 (190)

(端裏書) 池田先生 伊東

尔来益御万祥奉恐賀候、然ハ岩倉久姫殿御容体昨  
日迄追々佳候、昨朝ハ三十七度六分、昨夕ハ三十  
八度七分位之御体温にて諸症先々御順快ニ被為入  
候処、今朝頓ニ体温増進只今九時半拙診候処、四  
十度式分脈百四十度斗從て大渴、乍去御気分ハ為  
差御異状も無之今朝々飯式碗御用ニ被相成候、今  
朝来大熱にて大ニ心配、且ツ若殿様ニも甚御心勞  
被遊候ニ付、尊兄御都合次第御見舞被下候様自小  
生御願申上候様御申出ニ付不取敢此段申上候、只  
今船曳君え相談之上塩酸キニーネ十二グレイソ御  
頓服ニ差上申候、小生も今夕尚又参診之積リニ御  
座候、何卒宜敷奉願上候、尚後服も十グレイソ以  
上差上度候、御高案奉願候、不取敢急き草々頓首

九月卅日

5 明治 年 月 日 (1278)

参人々、以上

御文拝見もふしまいらせ候、おふせの通り兎角  
不順の時かふニ御坐候得共、先々御勇しくいらせ  
候御事御めて度御歎申上まいらせ候、左様ニ御坐  
候得ハ明廿七ハ御用召ニ入らせ候由、誠ニ御めて  
度御歎申上まいらせ候、右ニ付装束御入用のよし  
承知致しまいらせ候、ひとへの方ハ今朝外よりか  
りニ参り候間、裕の方差上候、尤夏ニてもあわせ  
用ひ候てよろしくト申事故、誠ニ龜末ニハ御坐候  
得共是にて御宜敷候半、御用立遊ハし被下候よふ  
願上まいらせ候、只今取込候段大乱筆御ゆるし願  
上まいらせ候、先ハ早々めて度かしく

なをなをいまた装束は数無御座候間、そまつの  
にて御氣もしさまニ存上まいらせ候

↙

池田御奥様 人々 伊東内

(注) 伊東方成夫人より池田謙齋夫人に宛てた  
手紙か。

6 明治32年4月 日 (191)

謹啓、時下春暖之候に御座候処益々御清適奉賀  
候、陳は亡父弘濟院<sup>(1)</sup> 来る五月二日一周忌に相  
当法会相営に付、乍粗末茶菓呈上仕候間、右御披  
露被下度此段奉願上候、敬具

四月 伊東精一郎  
男爵 池田謙齋殿 御家扶御中

(1) 伊東方成 明治31年5月2日没。戒名は  
弘濟院殿養道方成大居士。享年67。

#### [16] 伊東政敏の書簡

伊東政敏は明治10年より28年迄待医局医員を  
勤める。政敏の書簡は『東大医学部初代総理池田  
謙齋』上巻に2通掲載に付省略。

#### [17] 伊東盛雄の書簡

伊東盛雄は明治13年東大医学部卒業。21年よ  
り31年迄待医を勤める。盛雄の書簡は『東大医  
学部初代総理池田謙齋』上巻に2通掲載に付、未  
掲載分を記す。

1 明治 年10月4日 (3359)

一書恭啓仕候、時下冷気相成候処、益御健勝被成  
御起居奉敬賀候、陳は拙訳サロモン氏セラピー第  
一卷先般肅呈仕り候処、尚此節全篇竣功仕り候ニ  
付、御閑暇之節高閣奉願度一部謹呈仕候、御叱留  
被下度奉願候、書余其内拝趨万繰可申上候、頓首  
十月四日 盛雄 拜具

池田謙齋先生 玉坐下

#### [18] 伊東盛貞の書簡

伊東盛貞は明治4年より16年迄待医を勤める。

盛貞の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上  
巻に7通掲載に付省略。

#### [19] 井上達也の書簡

井上達也は著名な眼科医。井上眼科病院創立者。  
嘉永元年生まれ明治28年没。享年48。(1848-1895)

1 明治 年 月 日 (566)

(封筒表) 池田先生 御左右 井上達也

(封筒裏) ↙

貴翰難有拝読仕候、細川老人如仰「カタラクト」<sup>(1)</sup>  
初起之上少シク精神病有之乎、色素之視野悪シキ  
乎ニ見へ候中精神不定ニ付定ムル能ハズ、右之通  
リ専門家之用事無之症ニ付此迄通脳病御手当被下  
候ハ、難有奉存候也

(1) カタラクト 白内障

#### [20] 今村亮の書簡

今村亮は了庵とも云い父は伊勢崎藩医。華岡青  
洲に外科学を学んだ近代漢方医。文化11年生ま  
れ明治23年没。享年77。(1814-1890)

1 明治17年4月5日 (571)

僕

祖父山縣大弐<sup>(1)</sup> 明和ノ度柳子新論ト申ス書著述  
イタシ、時政ノ得失ヲ論弁シ弊風ヲ改正セントシ  
テ遂ニ為幕府所諱冤死ス、今上其無罪ヲ憐恤シ褒  
賞ノ典アリ、今般遺著新論ヲ刷印ス、因テ一本ヲ  
奉呈仕候、御収納是祈

四月五日 今村亮

(印刷物)

(1) 山縣大弐 甲斐国に享保10年生まれ明和4  
年没。江戸中期の儒学者・尊王家。柳子新論  
で幕府批判し死罪。その思想は吉田松陰に受  
け継がれる。

(注) 整理番号3548号に漢方医18名のリスト  
があるので参考迄に記す。

浅田宗伯・今村亮・清川玄道・岡田昌春・河内全

節・浅井篤太郎・飯田隆安・高橋宗翰・山田業精・松井操・橋諸徳・森田元碩・岡田玄澄・田中友信・黒岩静山・松山良禎・古川精一

右代理 山本高朗

## [21] 入沢恭平関連の書簡

入沢恭平は池田謙齋の実兄。ボンペに学び越後今町にて開業。明治7年1月没。享年44。恭平の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に21通掲載。未掲載分を記す。

1 明治 年11月12日 (269)

(端裏書) 池田謙齋様 要書御直披 入沢恭平  
口上

昨日ハ珍物紙御恵贈被下一同大喜宣布入書申出候、余り愉入候義何卒御一統様へ宣布奉希上候、昨日不意ニ金子入用之義出来、其上屋敷へ音物土産等入増今日払方ニ是非入用出組候間何卒十門程此ものへ拝借奉希候、屋敷之方もいまだ駈と相分り不申候へ共、一昨日罷出候処重役留守、尚昨日参候処来客にて重役家司へ悉言置参り申候、都合も宜敷候半様ニ相見申候、若林と申人はいまだ不相分今日仁和寺様へ<sup>十三日御立ニ付</sup>暇乞ニ参候間取調可申上候、十六日頃迄都合四十門程御才覚必々御頼申上度候、已上

十一月十二日

2 明治 年12月31日 (348)

見附町鍋屋久六二男顯七と申もの、今度出京ニ付一翰致啓上候、辰下敵寒之候ニ御坐候処、尊堂益御安泰被為在御起居奉欣賀候、随て弊地無異送光御休慮可被下候、乙松へ御托し之貴翰并廿五兩御封物ヒニ着参奉致上候、此もの全体尿之梅氣ニ感じ候由にて、小生長谷川泰一郎<sup>(1)</sup>始見違ひにて汞剤数百日連用いたし、為丈ケニもなき様子ニ候へども胸痛を発し候由、秋先少々手宛<sup>(マツ)</sup>致候へ共為差義ニも無之ニ付打捨置候処、暮近ク相成大分疼劇敷候へ共、是非東京へ不罷出候ては不相成ニ付、道中手宛薬願度由にて大晦日ニ使遣し、ラウリールケルス六十滴、エメチニグレイン、右二味溶解水ニして投し申候、若御地滞留ニも相成候

ハ、治療願ニ参候様申入候処、転出願度趣申聞候ニ付、則一封差上申し候、若願ニ出候ハ、乍御面倒御一診奉希上候、種々申上度義も御座候へ共、大晦日之事と申大多忙、何事も申上兼何れ十五日後ニは乙松尚罷登候ニ付其節委細可申上候、勿々頓首

十二月大晦日

入沢

池田様

(1) 長谷川泰一郎 長谷川泰の事。越後出身の医学教育者で済生学舎を創設する。

3 明治2年10月27日 (508)

覚

一、重炭酸ソーダ 上品 廿

但袋入にて洗紙包ニいたし候

右至急瀬戸物丁島屋飛脚ニ也共御出シ可被下候、尤此節仕銀ハ遣し兼候ニ付後便相送り可申候、以上

庚午十月廿七日

入沢恭平葉室

北越入沢 角印

越宗御店

## [22] 入沢達吉の書簡

入沢達吉は入沢恭平の長男。池田謙齋の甥。明治21年東大医学部卒業。東大医学部の入沢内科として有名。達吉の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に26通掲載。未掲載分を記す。

1 明治13年7月24日 (393)

(封筒表) 東京駿河台北甲賀町九番地

池田謙齋様 玉机下

越後下今町 入沢達吉 拜

(封筒裏) 七月廿四日投函

(消印今町七・二五)(消印東京一三・七・二八)

別紙御序之節浅岡<sup>(1)</sup>様へ御届け被下度候

拜啓陳は小生義過日六日町より鄙翰拜呈仕候通り当日同駅より川船にて長岡迄下り、翌廿一日当地へ安着仕候間此段乍慮外御休意被下度候、且帰省之節は種々御土産物頂戴仕誠に難有奉存候、母よりも宜敷申旨候、先は御礼迄、早々不具

七月廿四日

入沢達吉 拜

(1) 浅岡清 入沢達吉の母（ただ）の弟竹山門、  
後に横浜の浅岡清旦の養嗣子となる。軍医。

2 明治35年3月29日 (387)

拝啓、陳は別紙捺印仕候処肉あしき為少しく（欠）  
不明候、若シ不都合にても候はゞ重ねて御送付之  
御手数相願度候、先は申上度草々頓首

三月廿九日 午後 入沢達吉  
池田御叔父様 侍史

3 年11月10日 (1237)

拝啓致候、其後乍思御無沙汰申上候事御海恕相願  
候、扱て天文台の知人より明年の暦貫受候俣拝呈  
仕候、又甲州より柿到来候ニ付乍些少入御覧申  
候、先は右而已、頓首早々

十一月十日 入沢達吉  
池田御叔父様 侍史

4 昭和11年10月3日 (419)

（封筒表）杉並区西田町一ノ七三一

池田真次郎殿<sup>(1)</sup> 同房子殿<sup>(2)</sup>

（封筒裏）東京市小石川区駕籠町二二六

（電話「大塚」二二八七番）入沢達吉

住所・電話番号・姓名ゴム印使用）

拝啓、陳は先般拝呈仕候拙著随筆楓萩集正誤表差  
出申候間、乍御手数御訂正置被下度相願候、敬具

昭和十一年十月 入沢達吉

（添付の「楓萩集」正誤表省略。いづれも印刷物）

(1) 池田真次郎 池田謙齋の長男秀男の次男。  
男爵家を継ぐ。農学博士。

(2) 池田房子 池田謙齋の長男秀男の妻。男爵  
沖守固の長女。

5 昭和 年1月22日 (413)

（封筒表）池田房子様 人々

（封筒裏）東京市杉並区西田町一丁目七四三番地

入澤達吉 四谷（35）一〇二七番

拝啓、小池氏番地如左御坐候、安藤氏より委細の  
戸籍を参上候、令嬢ハ東京府第二高等女学校出身  
の由御坐候、先ハ右申上候事ニテ小生今晚より旅

行致し候

一月廿二日

入澤

池田様

6 昭和12年2月25日 (388)

（封筒表）池田房子様

（封筒裏）東京市杉並区西田町一丁目七四三番地

入沢達吉 四谷（35）一〇二七番

口上

先日卒業証書ハ大森にも無之候、又雑誌社から  
謙齋先生の御写真を借りに参り候、小生方にあり  
候モノ引越しにて唯今一寸いづれにかまぎれ込み  
候、一兩日中に貴宅のもの拝借致度候間、宜く奉  
願度

十二・二・二五

入沢達吉

池田房子様

### [23] 岩井克俊の書簡

岩井克俊は明治4年侍医寮医官、8年より侍医、  
10年より15年迄侍医局医員を勤める。

1 明治11年6月6日 (563)

御紙表拜見、陳は明七日御拜診日ニ候処、難御捨  
置御事件御出来、医学部え御出頭相成ニ付、明後  
八日御参診相成候段伊東方成殿へ申通候様御書中  
奉畏候、右為如此御坐候也

六月六日

当番 岩井克俊

池田二等侍医殿<sup>(1)</sup>

猶以別紙御拜命御届書早々本省え差出可申上  
候、已上

(1) 池田謙齋が2等侍医を勤めたのは明治10  
年10月12日より11年12月11日迄。依って  
本書簡は明治11年のもの。

2 明治 年6月7日 (3127)

拝啓、陳ハ目白之山縣殿より本日中午ニ御来診可被  
下候様申参候間右申上候、謹言

六月七日

当番 岩井 拜

池田先生 呈閣下

3 明治 年9月16日 (806)  
 拜啓、益御清康奉賀候、陳は昨日若松掌侍へ御約束相成候耳の葉申出候ニ付、御処方書御廻相願度如此御座候也

九月十六日 岩井克俊  
 池田一等侍医殿 侍史  
 追啓、宮中御静謐御休申可被下候、早々

4 明治 年9月21日 (1297)  
 益御清康奉賀候、陳は当御所詰山本雜掌侍事医学所にて製薬術得免許罷在候所、若御製薬所御取設ニも相成儀ニ御座候ハ、何卒被召遣被下候様御両公へ奉願呉候様昨夜申出候、右参上可申上管ニ御坐候得共、乍略儀入御聞申上候也

九月廿一日 岩井克俊  
 伊東一等侍医様  
 池田一等侍医様

#### [24] 岩井禎三の書簡

詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治26年2月15日 (64)  
 (封筒表) 神田駿河台北甲賀町 池田謙齋様  
 (消印) 武蔵・東京麴町・廿六年二月十六日□便  
 (切手 弍銭)

(封筒裏) 〆 二月十五日 岩井禎三  
 拜啓、倍々御清適奉賀候、陳は過日来時々山縣家へ御枉車被成下候処、イツモ懸違ヒ不得拝顔遺憾之至ニ御座候、御高見之通り令夫人ニは先般来気管支カタルヲ発セラレ、其後追々御軽快ニ被為向居候処、如何ナル訳ニヤ今朝ニ至リ痰中ニ極メテ少量之血液ヲ混出セリ、幸ニ甚ク御神経症モ無之、又他之発熱咯痰咳嗽等増加之兆モ相見得申全ク一時之出来事ト存候得共、昨今ハ御発病ヨリ満二ケ年ニ当リ、昨年モ満一ケ年ノ頃大磯ニ於テ少々出血セシ事有之、旁<sup>(マ)</sup>以テ用心ノ為メ橋本氏<sup>(1)</sup>之意見ニヨリ麦奴<sup>(2)</sup> 廿〇・八、丹寧<sup>(3)</sup> 〇・三、阿片末〇・〇三為丸一日三回分服トシテ差上置候間右様御承知被下度、今夕相伺候得共更ニ御変状無之候間御安心被成下度、尚御序モ被為在候得は御高診之上御意見御示し被下度祈上候、先は右御

報通迄、如此ニ御座候、頓首

二月十五日 岩井禎三  
 池田先生

- (1) 橋本綱常の事か。  
 (2) 麦奴<sup>ぼくど</sup> 麦角<sup>ぼっかく</sup>、子宮収縮剤・止血剤として用いる。  
 (3) 丹寧<sup>たんにん</sup> 单寧、収斂剤として用いる。

2 明治 年11月10日 (65)  
 (封筒表) 池田大先生 侍史

(封筒裏) 〆 十一月十日 岩井禎三  
 謹啓、山縣若様兩三日来扁桃腺(殊ニ左方)及咽頭ニ炎症ヲ発セラレ腫脹疼痛咳嗽等ノ症ヲ呈セリ、依テ硝酸銀水塗布、塩剥含嗽、撒曹内服等之処置致居候処、昨今彼是ノ部ニ白色之斑点ヲ現ハシ候様相見得、多分濾胞ノ潰爛セシモノナラン(牛乳渣滓ノ附着ニモアラサルベシ)ト被考候、何分局部ノ検査ヲ嫌ハレ十分認定仕兼候得共前條之次第ニ付ジフテリア等ノ傾キハ無之ト信居候得共、此際一応閣下ノ御尊診ヲ仰置度候間、御一診之上御高見御示し被下度希望仕候

十一月十日 禎三 敬具  
 池田先生 侍史

#### [25] 岩佐登弥太の書簡

岩佐登弥太は明治16年東大医学部卒業。21年より28年迄侍医を勤める。登弥太の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に1通掲載。未掲載分を記す。

1 明治22年4月27日 (577)

拜呈、益御多祥奉賀候、陳は兼テ出張被為命候肥田御料局長殿<sup>(1)</sup> 藤井田駅<sup>(2)</sup>ニ於テ負傷被為致候趣電報有之候ニ付、御見舞トシテ侍医高階経本殿<sup>(3)</sup> 明朝早々可差遣旨御沙汰ニ相成候間、右不取敢御報知申上候、右ニ付同侍医殿明日之御番ハ到底間ニ合ヒ兼候義ト被存候ニ付明日之御番如何取計ヒ候哉、何卒御教示被成下度奉願上候、右申上度勿々頓首

四月廿七日 岩佐登弥太



池田長官殿 玉貴下

- (1) 肥田浜五郎 天保元年生まれ明治22年4月27日没。伊豆生まれ幕末明治期の造船技術者。咸臨丸の機関長として渡米。横須賀造船所々長・第15銀行・日本鉄道の創設に尽力。享年60。（1830-1889）
- (2) 藤井田駅は藤枝駅の誤り。
- (3) 高階経本 典医高階家の一族。明治19年より侍医を勤める。

## [26] 内田頼輔の書簡

詳細不明。書簡の内容より医師と推定する。

1 明治 年2月5日 (827)

於知津様 御容体

二月四日夜、体温平度心動脈搏最モ不齊ニシテ心臓部ニ当リ間々刺痛ヲ覚エ頭痛眩暈手足冷エ、或ハ四肢ノ尖端ニ不遂ヲ覚エ始終全身ニ冷汗アリ、聊睡眠ノ時冷汗最モ甚シ、眼ヲ閉ツレハ魘夢ノ襲フカ如シ、食用毎ニ嘔吐シ六七日ノ処眠リナシ、右体容粗記載致し置候間宜敷奉願上候、尤も昨夜コロラールヒトラート<sup>(1)</sup>十五グレイン臨時頓服差上置候

二月五日 内田頼輔  
池田先生

- (1) コロラールヒトラート 抱水コロラール、鎮静睡眠剤。

2 明治 年8月30日 (595)

前略、平ニ御仁恕奉願上候、陳は大隈奥方今朝より少々寒冒之心地之処午后ニ至リ寒熱強、喉頭より胸部辺ニ至リ促迫シ、気分如何ニモ悪敷候ニ付、御多忙之折柄甚申上兼候得共御繰合ヲ以何卒御来診被下置候様被申聞候ニ付、此段乍恐以書中早々如是御坐候、以上

八月三十日 内田頼輔  
池田先生 御坐下

3 明治 年9月3日 (596)

奉拜啓候、然ハ大隈御隠居一兩日不快ニ付、御多忙之御半御願申上兼候得共、本日午前之内被為御繰合御来診被下置度候様奥より御願申上呉との儀ニ付、乍失敬以書中此段奉恐願候也

九月三日 午前 内田頼輔 拜  
池田先生 御膝下

4 明治 年 月 日 (597)

拜啓仕候、昨夜先生へ御願仕置候医師山崎武行之御書状一封、乍憚此人ニテ御恵投被下度奉願候、私義參殿御願仕候義ニ候得ども無拋事故有之、乍慮外以書中此段御願候也

十二月十二日 内田頼輔 拜  
池田先生 御門下生御中

## [27] 大沢謙二の書簡

大沢謙二は東大医学部初の日本人教授となり日本の生理学を築く。謙二の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に5通掲載に付省略。

## [28] 大谷周庵の書簡

大谷周庵は安政6年生まれ昭和9年没。明治16年東大医学部卒業。同年県立新潟医学校・翌17年熊本医学校・30年長崎病院長・長崎医会々長歴任。享年76。（1859-1934）

1 明治16年6月5日 (824)

逐日暄煖之候益々御清榮奉拜賀候、在京中万々御世話ニ相成御礼奉申上候、陳は小生儀去ル五月廿八日ニ新潟へ着、其俣御命ニ從ヒ竹山氏ニ依リ諸件御相談申、同氏甚タ懇切何事モ御依頼申、誠ニ都合宜敷三十日ニ医長ニ令セラレ当分ノ内外科通論、内科各論、臨床講義等ヲ受持候、何分取付故諸事困厄ノ折ニモ有之候供、竹山氏小生ノ欠タルヲ御補ヒ被下候、格別ノ失策モ不致日々出勤仕不及ナガラ当校ノ盛大ヲ謀居候、竹山氏ヨリモ宜敷被申越候、当時校務煩雜寸暇無之乱筆御用捨程奉希上候、早々頓首

(十) 六年六月五日 大谷周庵 拜  
池田謙齋様 閣下

2 明治16年6月15日 (746)

(封筒表) 東京神田区駿河台北甲賀町九番地

池田謙斎様 御□□

(封筒裏) 六月十五日 出

新潟県新潟区旭町通老番町拾一番地 大谷周庵

(消印) 東京一六・六・一八

過日来御不快之趣承り大ニ心配仕候、然処現今如何之御様子ニ御坐候や、兎角不整之時候ニ候間、御養生専一ニ奉存候、頓首

六月十五日

大谷周庵 拜

池田謙斎様 玉執下

### [29] 大槻の書簡

詳細不明の書簡。本書簡は出信人の名前を含め池田謙斎の筆跡と推察され、謙斎が処方を書いて大槻氏へ渡したものか。又大槻肇の筆跡ではない。

1 明治 年5月16日 (657)

角川祐教殿

一、綿馬ユキス<sup>(1)</sup> 四十グレイン

綿馬根末 一オンス

右百丸六包ニ分ち、一字毎ニ一包宛

右空腹後 夕刻

一、ヤーラツパ末<sup>(2)</sup> 二十グレイン

甘汞<sup>(3)</sup> 六グレイン

右散一包頓服

五月十六日

一、リチネ油<sup>(4)</sup> 一オンス

上下夜頓服

本町一丁目 大槻

(1) 綿馬<sup>めんぼ</sup> オシダ属のシダ(植物)で根茎を綿馬根と云い駆虫(回虫・条虫)剤として用いる。

(2) ヤーラツパ ヤラツパ、ヒルガオ科多年生つる草の塊根。下剤として用いる。

(3) 甘汞<sup>かんこう</sup> 塩化水銀。下剤として用いる。

(4) リチネ油 ひまし油。下剤として用いる。

### [30] 大槻肇の書簡

大槻肇は大槻俊齋の長男玄俊。大槻俊齋も肇と名乗っていたのでこの肇は二代目肇に当たる。天保12年生まれ明治41年没。享年68。(1841-1908)

1 明治 年1月5日 (818)

当家患者昨日より今日ニ至り軽快ニ向候様相考候、午後五時半ニ診察仕候処、脈搏七十六動、体温三十七度四分、今朝はキニーネ不足故六グレインヲ頓服之由、寒気も午後少々有之候得共昨日より大ニ減し気分も今日は快氣之模様ニ候、熱発も余程相減し候様子ニ候、水葉を服し候得共悪心嘔氣を発するよし、乍去前御法之水剤一服量ヲ減し数回ニ延服可然と相考候、キニーネの同量明朝今一応頓服被致候方宜敷様存候、尚御高案被仰付度奉願候也

一月五日

大槻肇

池田先生

### [主要参考文献]

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社

1994年11月30日発行

霞会館諸家資料調査委員会編『昭和新修華族家系大成』

上・下巻 霞会館

1984年4月10日発行

池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙斎』上・

下巻 思文閣出版

2007年2月25日発行

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館

1981年9月10日発行

遠藤正治著『明治期の侍医制度と池田文書』吉田忠・深

瀬泰旦編『東と西の医療文化』思文閣出版

2001年5月11日発行